

齋藤貞夫著 川越舟運—江戸と小江戸を結んで

三百年：さきたま出版会，1982年，B6判247頁

新河岸川は大きな川ではないが，小江戸とよばれた川越と江戸とを結び，近世から明治・大正期にかけて交通運輸の上で大きな役割を果たしてきた。この研究は故磯崎優・原沢文弥・大井武等の諸氏によって地理の側から早く始められていたが，いずれも散発的なもので，長期にわたる本格的な研究として著者のそれにまさるものはない。

この川の河岸問屋で最後まで営業を続けてきたのは新河岸の伊勢安であり，最後の舟問屋となった同店店主14代齋藤安右衛門氏は著者の御尊父である。同氏は水運廃止後，昭和46年の逝去の日まで，世人の記憶から遠ざかっていく同水運の史料の蒐集や遺構・遺物の保存につとめ，紹介記事の執筆を重ねてこられた。著者の新河岸川水運研究は厳父の遺志を継承してのものである。父君の場合は家業のかたわらの研究であり，意に満たぬ点多かったことと思われるが，氏の場合は家業は令兄が継がれており，国学院大学と早稲田大学で本格的な史学研究法を学んでこの研究に専念されること既に20年，20篇に及ぶ論著を発表されてきた。これらの研究に基づいて著わされたのが本書である。家業と研究と双方に良き後継者をもたれた御尊父はまことに幸せな方といえよう。

全巻8章より成り，これにプロローグ・エピローグ，さらに巻末に年表と参考文献を収める。「(1)新河岸川を下る」では，全部の河岸につき往時の盛況と現状が紹介される。上下新河岸・牛子・寺尾・福岡・古市場をはじめ，志木・新倉・戸田諸河岸について詳細な復原図が付され，巡検の手引きとして好資料である。「(2)川越五河岸の成立」で，上下新河岸・寺尾河岸・扇河岸・牛子河岸の成立事情が説かれ，「(3)舟運の開始」では松平信綱以来の川越藩との関係，とくに年貢米輸送について述べられる。「(4)舟運の繁栄」では，船の数と種類・荷物の種類と運賃・旅客輸送等水運史研究で一般に取り扱われる事項のほか，船頭の生活や船大工のこと，関係者の信仰と民俗等幅広く解説され，舟唄も紹介されている。輸送物資の中では記念碑の運搬や，熱海温泉の湯を樽詰めにして川越方面へ運んだとの指摘が目新しく興味深い。「(5)船問屋あれこれ」では問屋数の増減や経

営内容を述べ，さらに「伊勢安」を事例に店舗の建築から家訓・系譜・家譜商業秘伝が紹介されている。家訓・家法については交通史では取り上げられていず，商業史の方での報告事例はあるものの三都の豪商か近江商人の場合であって，船問屋については今回ははじめてではなからうか。著者の生家についてのことであり，研究上の便宜からいえば恵まれているものの，一寸言及するだけでも「私事にわたって恐縮だが」と書くような世相において，生家なるが故に書き難かったのではなからうか。あえて取り上げるにより，関係学界に好資料を提供された著者の決断に敬意を表したい。

「(6)大江戸と小江戸」では，舟運を通じて江戸文化の川越等沿川各地への流入が論ぜられ，浮世絵・舞踊・俳句・書道・国学等の人物の事績が述べられ，川越の蔵造りや川越まつりも江戸文化に学んだものとして紹介される。このような文化史的分野は，普通は交通史や歴史地理の方では扱わない事項であって，著者の視野の広さを物語るものである。舟で運ばれた美術品として，地図の絵皿が取り上げられていることは地理関係者には見逃せないところ，九州絵皿は指摘のごとく稀有のものであろう。「(7)明治期の舟運」では中牛馬会社や内国通運との関係，仙波河岸の開設，蒸気船の開通計画が述べられ，「(8)舟運の衰退」では衰退に導いた因子として，鉄道と河川改修を取り上げる。鉄道については水運関係者が時勢を見抜き，鉄道を忌避することなく，むしろ積極的に誘致につとめているとの記述が興味をひく。

序文にも明記されているように著者の本書刊行で意図される場所は，広く地域住民に新河岸川舟運のことを知ってもらい，学校教育における郷土学習にも役立たせたいということである。ほとんど毎ページに写真や図表を入れ，固有名詞や専門用語にはつとめてふりがなをつけ，解説を入れる等，多くの人に親しめるよう留意されたあとを察することができるし，通読に苦勞せぬようまた価格が高くならぬようコンパクトにまとめられている。それだけに専門研究者の側からはより詳細な論述や，豊富な原史料の提示を求められる向きもあろう。巻末に文献として掲げられた著者の多数の論文がこの要請にこたえるものではあろうが，他日研究書としての別書をまとめていただければ幸である。さきにもふれたよ

うに、本書が巡検の手引き書として好都合に作られていることは、われわれ地理の教職にあるものにとってまことに有難いことである。私をはじめ新河岸川水運について学んだのは、学生時代に岩田孝三先生指導の巡検で志木河岸を訪れたときであった。

自身が教職についてからは、何回となく学生・生徒を連れて現地を訪れている。そのつど何冊もの雑誌論文を携行しなければならなかったが、今後は本書が無二の伴侶となることであろう。

(中島 義一)